

# 北方事件・たった一人の支援

## ―田崎以公夫さんのライフ・ヒストリー―

平山 咲子

### 目次

はじめに―問題提起―

第一章 田崎以公夫さんのライフ・ヒストリー

第一節 誕生から北方事件発生まで

誕生から唐津尋常小学校・唐津国民学校時代

唐津中学、武雄高校時代

浪人時代を経て、中央大学法学部へ

帰郷、日本共産党への入党

第二節 北方事件発生から無罪判決まで

北方事件の発生

Mさんの逮捕

無罪判決

第三節 無罪確定後

北方事件が残したもの

無罪確定後の田崎さん

第二章 田崎以公夫さんのライフ・ヒストリーの考察  
終わりにかえて――残された課題――

関連年表

資料（新聞記事・「脅迫状」）

## はじめに―問題提起―

「偽」という言葉に象徴される二〇〇七年は、冤罪事件の多さが改めて注目された年でもあった。具体的には富山県で起こった連続婦女暴行事件で別の事件などで公判中の男が自供したため冤罪であることが判明した氷見事件や、鹿児島県の県議選買収で無罪が確定した志布志事件、そして佐賀県で起こった女性連続殺人事件で七月に無罪が確定した北方事件など冤罪であることが認められる事件が相次いだ。また、一九六六年に発生し一九八〇年に最高裁で死刑が確定して再審請求中の袴田事件では、一番の裁判官が当時「無罪の心証を持っていた」と公表した。

ところで二〇〇九年五月までに「裁判を身近で分かりやすいものにする」、「司法に対する国民の信頼を向上させる」という目的から裁判員制度が導入される。裁判員制度開始を控えて虚偽の自白を迫られた冤罪を防ぐための手段として取り調べの「可視化」を求める声も高まっている。

周知のように、九九・九パーセントと世界的に有罪率の高い日本の刑事裁判で無罪を獲得するには、氷見事件のように真犯人が見つかること、志布志事件のように警察・検察の不法な捜査・取り調べが「リーク」を含めて明白になること以外には、弁護団の献身的な活動は言うまでもなく、裁判傍聴をはじめ様々な形での長期にわたる地道で強力な支援活動が必要とされる。冤罪被害者にとって支援がある、つまり自分の無実を信じてくれる人がいることが、家族や友人など「外」にいる人との接触がほとんどできない中で唯一無二の支えになるからだ。袴田事件などの再審請求中の事件や実際に無罪を勝ち取ったほとんどの冤罪事件で多くの支援の手が差し伸べられている。しかしながら注目すべきことに先に挙げた北方事件に関しては、組織的な「支援する会」の活動はおろか、周辺住民が集まって裁判を傍聴に行くなどの動きも一切なかった。そんな中、犯人とされた「Mさん」と同じ北方町に住み当時町会議員であった田崎以公夫（たさき・いくお）さんは、Mさんが犯人であることに疑問を抱き、雪冤を果た

すために面会・裁判傍聴・証人としての出廷・町民への広報活動・収監中の被告との手紙のやり取り・議会質問などを通じて行動した（たった一人の支援者であった。もし田崎さんの行動がなければ、無罪獲得はより時間を要したかもしれない、また最悪の場合実現しなかったかもしれない）。

ところで北方事件については、佐賀県警の別件逮捕・「自白」強制など捜査の問題性、検察の「意地」のための起訴、犯罪報道のあり方などが指摘されてきた。たしかに新聞各紙は、Mさんの支援者としての田崎さんのコメントや田崎さんが発行しているミニコミ紙『北方民報』紙上でMさんが母親に宛てた無実を訴える手紙の一部を掲載したことなどを紹介した。しかし、北方事件のように支援者が一人だけという非常に稀なケースであるにもかかわらず、田崎さんについてマスコミは彼がどのようにして《たった一人で支援する》という思想を形成し、様々な支援活動をするに至ったか、その背景までには言及していない。

そこで本稿では、北方事件で《たった一人の支援者》であった田崎以公夫さんのパーソナリティ形成とその変容、冤罪と確信し支援するに至った過程と行動の具体的内容、そして田崎さんが現在事件を彼の人生においてどのように位置付けているかを明らかにしたい。

ところで個人の生活構造に焦点を当て、個人の一生やそこで展開される生活構造の変遷の探求、個人と社会の連動関係の把握、人間行動の内面理解において有効な方法として、ライフ・ヒストリー法がある（1）。そこでインタビュー取材を行い（2）、支援者・田崎さんの誕生から現在までをたどり先述した本稿の目標を果たしたい。

## 【注】

- （1） 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』（世界思想社・一九九六年）Ⅲ、iv頁
- （2） 二〇〇七年十二月五日、二〇〇八年一月十五日に北方町の田崎以久夫さん宅にて約十時間実施。インタビュー

ユア―は安部俊二教官と筆者・平山咲子。

## 第二章 田崎以久夫さんのライフ・ヒストリー

### 第二節 誕生から北方事件発生まで

#### 誕生から唐津尋常小学校・唐津国民学校時代

田崎以公夫（たさき いくお）さんは、一九三二（昭和七）年二月六日、佐賀県杵島郡（現在は武雄市）北方町に父・四郎さんと母・ヨシさんの間に五人兄弟の次男として生まれた。四郎さんの日中戦争出征の年に生まれたため「軍雄（いくお）」と命名された。四郎さんは福岡の学校を卒業し、復員した後、杵島炭鉱大町鉱業所に勤めていた。田崎さんが小学校へ上がる前に、四郎さんの東松浦郡入野村（現在の肥前町）の大鶴鉱業所（一九三五年開坑、一九五七年閉山）への転勤にともない一家で大鶴へ転居した。

杵島炭鉱は高取伊好が創設した佐賀県最大手の鉱業会社であった。唐津の赤坂口、福母炭鉱や北方炭鉱などを買取・開発して発展した。一九二六（大正十五）年には大町の佐賀炭鉱を買収、社名を杵島炭鉱株式会社とし、全国有数の出炭量を誇る炭鉱となった<sup>(1)</sup>。一九三五（昭和十）年に開坑した大鶴炭鉱は杵島炭鉱が買収し杵島炭鉱大鶴鉱業所となった。この頃は炭鉱の発展にともなって入野村の人口が増加していった時代であった<sup>(2)</sup>。

一九三八（昭和十三）年四月、唐津尋常小学校（一九四一「昭和十六」年から唐津国民学校）に入学した。入学してすぐ、大鶴で登校中に股関節を痛めたため、坂のある田舎道を一時間かけて通学することが困難となった。そこで、ヨシさんは四郎さんを大鶴に残し、田崎さん達兄弟五人を連れて唐津へ移り住んだ。田崎さんは足の怪我の

ために休学していたため、翌年から再び一年生として学校へ通った。

国民学校三年時の一九四一年十二月八日、太平洋戦争が勃発。戦時中は四郎さんが炭鉱に勤めていたので杜宅の家賃、電気代、燃料代がかからなかったこともあり、さほど不自由な生活ではなかった。低学年の時には、当時ほとんどの子供がもっていなかった自転車を買って与えられたこともあった。食料も、他の家に比べるとゆとりがあり、戦後まで農家に野菜を分けてもらいに行ったり、服と食料を交換したりという経験はなかった。また当時四郎さんは炭鉱の用度課の課長をしており、配給所（炭鉱の売店）の所長も兼任していた関係で、高取邸③へ食料や資材を運ぶ仕事もしていた。その荷物の中には当時あまり手に入らなかった桃の缶詰があり、一部を自宅に持ち帰って食べさせたこともあった。田崎さんは「食べ物をもっと食べていたから気持ちにゆとりができた」と語った。食べ物を十分に食べることができていたことが気持ちにゆとりを与え、穏健な性格を形作り、他人に対する同情の気持ちを持つことができたと考えられる。

戦時一色の中、軍国教育を受け周りの子供たちと同様に、軍隊に憧れを抱いていた田崎さんは、国民学校六年生の時に、学校で募集のあった海軍の航空機乗員養成所の試験を受けた。航空機乗員養成所は昭和十年代に通信省（旧郵政省とNTTの前身）が設置した民間航空機乗員を養成する施設である。（4）受験に反対した両親を納得させるために、整備士という条件での受験だった。体格試験では合格したが、幸か不幸か筆記試験で不合格であった。当時、同級生たちはほぼ全員が受験の意思を持っていたが、みな親に反対され、結局田崎さんと同じ海軍を受験したのは五人足らずだった。

国民学校五、六年時（一九四三、四四年ごろ）に炭鉱から逃亡しとらえられた朝鮮人採炭夫への暴行を目撃した。これは、後述するように田崎さんが自我を形成する上で最も影響を与えた出来事の一つとなった。

ここで当時の朝鮮人炭鉱労働者のおかれた状況について触れておきたい。一九三二（昭和六）年の満州事変、一

九三七（昭和十二）年の日中戦争を受けて政府は石炭を大幅に増産する方針を打ち出したが、これは炭坑労働力の不足を招いた。そのため炭坑要員充足の決め手として政府が考えたのが朝鮮人と中国人の強制連行であった。朝鮮人に関しては、この時すでに全国各地で多数働かされていたが、一九三九（昭和十四）年「朝鮮人労働者内地移住の件」を決定しさらに強制連行を行った。同年杵島炭鉱も朝鮮人労働者を入坑させ始め、翌一九四〇（昭和十五）年までに一、三七六人が杵島炭鉱に送り込まれた。県内の他の炭鉱でも強制連行してきた朝鮮人を採用していた。特に大鶴炭鉱では朝鮮人坑夫の占める割合が非常に高く、一九四〇（昭和十五）年には坑員の八十パーセント近くが朝鮮人であった。当時は、日本政府も、軍部も、独占資本も、朝鮮人労働者を安価な労働力そのものとみなし、また日本国内の労働力の「調整自由自在の安全弁」として利用するのみで、ほとんどの日本人も一九一〇年に日本が朝鮮を植民地化して以降、「朝鮮人は日本人の奴隷である」という、朝鮮人蔑視、差別の考えを強く持つようになり、朝鮮人に対する暴行も珍しくない時代であった。そのため、朝鮮人炭鉱労働者の待遇は非常に厳しいものだった。（⑤）田崎さんが見た朝鮮人は、寮に住み食事は麦のような黒っぽいご飯と梅干とたくあん二切れといった大変質素なものであった。寮の奥まったところには高い塀で囲まれた朝鮮人労働者専用の慰安所もあった。一九四一（昭和十六）年から一九四五（昭和二十）年の太平洋戦争の時期は、炭坑労働者が最も不足し、労働条件も過酷さを極めており、一日十二時間にもわたる労働を強いられていた（⑥）。中にはその苦しさに耐えかねて、海や山へ逃げ出す者もいたが、探し出して連れ戻されることがほとんどであった。

田崎さんが見たのは連れ戻した朝鮮人坑夫四、五人を海岸に並ばせ、後ろ手に縛り海へ蹴落とすというものだった。蹴落とされた朝鮮人は海中でもがき、悲痛な声で叫んだ。殺すところまではしなかったが、同じ肌の色をした人を痛めつけるという光景は田崎さんにとって非常にショックなもので、そのために暴力に対する強い「違和感」「拒否感」を持たせることになった。これは田崎さんの後の行動に影響し、日本共産党入党の動機の一つ、北方事

件に関わる一つの背景となった。

### 旧制唐津中学、新制武雄高校時代

一九四五年（昭和二十年）四月、旧制唐津中学校へ入学した。敗戦までは戦争に対し疑問を持たず、田坂具隆監督の映画『海軍』を見て、短剣に白い手袋、帽子を身につけた海兵に憧れ海軍兵学校を目指したこともあった。

終戦間近には、米軍機による空襲が非常に多かった。唐津に住んでいたため、大きな被害が出ることはなかったが、登校途中に空襲警報が鳴り学校に行けなかったこともしばしばであった。このため戦時中は、さほど恐ろしい目にあわなかったが、落ち着いた生活を送ることはできなかった。

一九四五年六月の福岡大空襲は当時住んでいた唐津から目撃した。福岡大空襲は、六月十九日から翌二十日にかけてアメリカ軍のB二九爆撃機の編隊二百三十九機により行われ、福岡市の市街地を標的にし、博多や天神を中心に爆撃が行われた。これにより千人以上が死亡・行方不明となった<sup>(7)</sup>。夜には空襲は唐津からでも赤々と見えた。田崎さんは当時を振り返って次のように語った。「しかし、遠いところですからね。そんなに恐ろしいちゅう感じがせんで、まさか花火見る気持ちじゃなかったですけど。そこに何人か、多くの人がね、その泣き叫び、殺され、傷つきね、なんていうのはあんまり想像できんですよね。」と。あとでみんなが空襲らしい、福岡がやられているという話をきいたが、その悲惨さはその当時想像できるものではなかった。

終戦間際に、田崎さんは姓名判断に凝った母・ヨシさんの勧めで「以公夫（いくお）」と改名した。三つの漢字の画数を足すと「徳」と同じ画数になるという理由だった<sup>(8)</sup>。戸籍上は現在も「軍雄」である。

そして、一九四五年（昭和二十年）八月十五日の終戦を十五歳で迎えた。この日は友人と海水浴へ行っていた。玉音放送があるということを知り、そのまま友人の家まで行ってラジオで聞いた。その場にいた大人たちが一様に



沈痛な面持ちなので、何か重大なことが放送されているのはわかったが、その意味をすぐにはよく理解できずなんとなく放送を聞いていた。戦争に負けたからどうにかなるという実感もなかった。その放送の意味がわかってきたのはその日の夕食のとき家族で話している時であった。

敗戦は、「軍国少年」だった田崎さんにとってショックな出来事で、一つの「転換点」となった。田崎さんによれば当時の気持ちは「ぼかーんと穴が開いたようなちゅうのかな。腰が抜けたちゅうのかな」というものであった。それまでの軍国主義的思想・目標が突然否定されたため虚脱感を感じたのだった。

敗戦直後は、多くの人がこれまで突き進んできた道から百八十度転換を求められ、進むべき方向を見失った時代であった。そんな中、田崎さんも何もない白紙状態の中からこれからどう生きるかということを考えるようになった。敗戦後の中学校二年の時、英語の授業中、先生が「お前たち、今からなんになるか？」と生徒たちに聞いたことがあり、田崎さんは、強固な意志ではなかったが「政治家になりたい」と答えた。

翌四六（昭和二十二年）年に母ヨシさんが結核のため、四十八歳で他界。このことは田崎さんの中で非常にショックな出来事であった。その約一年後に父は再婚している。

一九四八（昭和二十三年）年の学制改革により、旧制唐津中学校は唐津第一高校（現・唐津東高校）となった。高校一年のとき、田崎さんは家にあった古いキリスト教の本を学校へ持っていき読んでいたことがあった。漢文の授業中、その本を机の上に出していたら先生に見つかってしまい、しかられるかと思ったが、先生は黙って頭をなでた。このことは印象的な出来事だった。

二年生からは新制・武雄高校に編入し、一九五〇年（昭和二十五年）三月に卒業した。一九五一（昭和二十六年）、父・四郎さんが杵島炭鉱の後押しで北方町長を一期務めた。このことは後に田崎さんが政治の道へ進んでいったことの一つの背景となったのと同時に、会社の都合で担ぎ出され、切り捨てられたことに矛盾を感じ革新的な思

想を持つきっかけの一つになったかもしれない。

### 浪人時代を経て中央大学法学部へ

熊本大学を受験したが失敗し、その後一年間、当時福岡に住んでいた姉の元で浪人生活を送った。時間に追われるような勉強ではなく、図書館に通い受験勉強をしていた。田舎から博多に行くということもあり、遊びまわってあまり勉強も手につかなかった。

そんな中、九州大学・社会科学研究会（社研グループ）の学生が主催したサマースクールに通うようになった。大学の入り口に募集の看板があり、それを見たのがきっかけだった。後に、社研グループの学生は日本共産党系の学生の集まりで、共産党の社会主義的な考え方を広める活動の一環であったことがわかった。このサマースクールでの出会いが後の田崎さんの人生に大きな影響を及ぼすことになった。サマースクールでは、勉強だけでなく筑紫耶馬溪に連れて行ってもらったりと田崎さんにとつてとても楽しいものだった。サマースクールが終った後も学生の下宿に行くなどたびたび行き来があった。ある時、学生から赤岩栄牧師（9）の講演に誘われたが直前に警察によって差し止めになってしまった。一九五〇（昭和二十五）年に始まったレッド・パージ（10）がふきあれていた一九五二（昭和二十七年）年のことであつた。田崎さんは、「言論抑圧とかそういうことはわからないが、やろうとしたことをなぜ止められるのか、話そうとする話を聞かせないはなぜなのか」と大きな疑問をもつことになった。この経験から、田崎さんは「世の中を大きく見てみたい」と考え、東京の大学を受験することを決意した。

早稲田大学政経学部を受験したが不合格となり、一九五二（昭和二十七年）年四月に中央大学法学部に入学した。入学後から、「世間を見たい」という思いで、学校へ行くよりも共産党系の講演会や演説会に参加するほうが多かった。同年五月一日に第二十三回メーデー、いわゆる「血のメーデー」に参加した。日米講和条約発効三日目に神宮外

苑で開かれたメーデーは再軍備反対と皇居前広場の開放を決議し、都学連の学生などデモ隊六千人が、皇居前広場へ入ろうとして警官隊五千人と衝突した。警察側の発砲によって二人が射殺され、多数の重軽傷者が出た事件である。田崎さんは警官の発砲によって二名の死者が出たことや、メーデー参加者が負傷した警察官に投石するのを見たことで自分の求めているものとの「ずれ」を感じた。

その後、司法試験など資格試験に合格したいという目標が見つからないまま、住み込みのアルバイトなどを続けていた。当時、稼ぐことよりもっと優先するべきことがあるのではないかと就職することを快く思わず、西日本新聞社の入社試験を受けたが就職できなかった。四年まで進学したが、結局一科目を残して卒業できず除籍処分となり、東京で居酒屋を開いていた知人に田舎へ帰ったほうがいいと諭されたこともあり帰郷を決意した。

このころ肥前町では、一九五六（昭和三十一年）年に政府が大鶴鉱業所を買い上げたが、エネルギー革命の波によって同年十一月に閉山、一九五七（三十二年）年に坑口が閉鎖され、町の人口は流出していった。（11）父・四郎さんは、大鶴炭鉱が閉山する前の一九五五年ごろに北方に戻り、佐賀市白山にあった杵島炭鉱本社で働き始めた。

### 帰郷、日本共産党への入党

一九五八（昭和三十三年）年頃、実家がある北方町へ帰ってきた田崎さんは学習塾を始めた。当時の杵島郡北方町は北側が多久市、東側が杵島郡大町町、白石町に接しており中央部には国道三十四号線と国鉄佐世保線がほぼ東西に通じていた。町の北部には一九四〇年に採掘が再開された杵島炭鉱の第二坑（北方炭鉱）と、一九三八年に開業した明治鉱業の西杵炭鉱が稼働しており、石炭産業好況時は街も活況を呈していた。しかし、重油・外国炭の輸入などに押され石炭不況が始まり、杵島炭鉱は衰退。北方炭鉱は一九五七（昭和三十一年）年四月に、西杵炭鉱は一九六四（昭和三十九）年四月に閉山した。現在は、閉山遊休地にゴルフ場を設け、工場の誘致や農業の多角化に力を

入れている(12)。二〇〇六(平成十八)年三月一日には武雄市と合併した。

その塾は「英数フレンド会」という名称で、中学生を対象に英語と数学を教えた。一クラスは十二人ほどで一年生、二年生、三年生と分け、いい時にはフル回転していた時期もあった。しかし、二年、三年と続けるうちに次第に身が入らなくなり、生徒も減り始め苦しい生活をしていた。

石炭産業の斜陽化のなかで杵島炭鉱は一九五七(昭和二十二)年には九十七日間、一九六一(昭和三十六)年には百三十二日間のストなど労働争議が相次いだ(13)。当時杵島炭鉱には県内最大の共産党の組織があり、党幹部の中野重治や山田六左衛門などが講演会に來た。田舎に帰ってきて、話に飢えていた田崎さんは、共産党の活動に参加するようになり機関紙『赤旗』を読み始めた。そして一九五九(昭和三四)年六月、二十六歳の時共産党に入党、『赤旗』の配達の仕事を前任者から引き継ぐ形で始めた。配達を始めた当初は学習塾と両立していたが難しくなり四年ほどでやめ、赤旗の販売所である分局の局長として共産党の仕事に本格的にする専従になった。

分局での仕事は、『赤旗』の早朝配達、集金などが主なものであった。だが、収入が少なく遅配もあったため不安定な生活だった。夕食時に集金に出かけて行き夕食をご馳走になったり、質屋に通ったりすることもあった。

一九六九(昭和四十四)年三十七歳の時、アイコさんと結婚。共産党の地区委員長などの上司が結婚しない田崎さんのことを心配して設けた見合いで知り合った。アイコさんは当時中学校の音楽教師で、五十五歳で退職するまで勤めた。田崎さんとの結婚は、学生時代から共産党員だったアイコさんの弟にも相談し、生活が不安定であることも理解して決めた。一男一女をもうけ、現在は二人とも独立し離れて暮らしている。

一九七〇(昭和四十五年)年北方町議補欠選挙に出馬し落選、翌七一(昭和四十六)年、三十九歳で北方町議選に共産党から再出馬し、定数十八のうち十四位、二百三十四票で当選。この頃、北方町内にあった杵島炭鉱北方鉱業所はすでに閉山し、明治鉱業の西杵炭鉱がかるうじて存続している状況だった(14)。田崎さんが開いていた学

習塾は西杵炭鉱のすぐ傍にあり生徒の保護者と付き合いがあったため、その繋がりも田崎さんには選挙のときの大きなプラスになった。二期目は一九七五（昭和五十）年の選挙で三百五十三票を獲得し、三位で当選した。

【注】

- (1) 井出以誠『佐賀縣石炭史』（金華堂書店・一九七三年）九七頁
- (2) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集 佐賀県朝鮮人強制連行、強制労働実態調査報告書』（同会・一九九四年）八六頁
- (3) 杵島炭鉱の創業者・高取伊好「たかとり・これよし」の旧宅で唐津市北城内の海岸沿いに建っている。内部には能舞台や欄間があり、一九九八（平成十）年に国の重要文化財に指定された。（唐津観光協会ホームページより <http://www.karatsu-kankou.jp/>）
- (4) 諫早近代史編集委員会編『諫早近代史』（諫早市・一九九〇年）四七四頁
- (5) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集』（同会・一九九四年）二二頁
- (6) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集』（同会・一九九四年）二二頁
- (7) 福岡市総務局編『福岡の歴史』（福岡市・一九七九年）二二九―三三〇頁
- (8) 実際は「以公夫」は二三画。
- (9) 昭和時代の牧師、思想家。愛媛県出身。東京神学社で高倉徳太郎にまなび、昭和六十年代々木上原教会を創設。戦後キリスト教とマルクス主義との両立をとえ、共産党入党の決意を表明し「赤い牧師」と話題になった。〔一九〇三・一九六六〕（下中邦彦編『日本人名大辞典 現代』（平凡社・一九七九年）五・六頁）
- (10) [red purge] 赤色追放。共産党員やその支持者またはそれとみなされた者が、その思想信条や政治的立場

を理由に、公職や企業から不当に解雇・追放されること。朝鮮戦争勃発(ぼつぱつ)の直前である一九五〇年五月、マッカーサーは共産党を法の保護外に置くことを示唆し、六月六日には日本共産党中央委員会全員二十四名、『アカハタ』編集幹部十七名の公職追放を命じ、いっさいの集会・デモを禁止した。朝鮮戦争開戦とともに公職追放の範囲は、新聞・放送関係、電気・運輸などの重要産業部門のすべてに拡大し、九月一日の政府決定によって政府機関や公共部門にまで及んだ。追放指名者は占領軍の示唆や口頭指示を口実に政府と経営者の手で決定され、解雇された労働者は米軍の憲兵や武装警官隊によって実力で職場から排除された。このとき、裁判所は、占領軍の命令を憲法に優先するものとして身分保全の申請を却下し、労働委員会も審問拒否の態度をとった。共産党は内部分裂と混乱のために有効に対処しえず、社会党や大多数の労働組合もこの不当解雇を傍観した。さらに、一部の右翼的組合幹部は当局や経営者に積極的に協力し、日本の労働運動は大きな打撃を被った。(社会科学大事典編集委員会編『社会科学大事典19』鹿島研究所出版会・一九七一年 一六七—一六八頁)

- (11) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集』(同会・一九九四年) 八六頁
- (12) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集』(同会・一九九四年) 六八頁
- (13) 井出以誠『佐賀県石炭史』(金華堂書店・一九七三年) 二九四頁
- (14) 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『原爆と朝鮮人 第六集』(同会・一九九四年) 七〇頁

## 第二節 北方事件発生から無罪判決まで 北方事件の発生

北方事件が起こったのは田崎さんが議員になって五期目の一九八九（平成元）年で、六十七歳の時だった。これは、杵島郡（現武雄市）北方町大峠の雑木林で、殺害された女性三人の遺体が発見された事件である。被害者は八九年一月二十五日に失踪した北方町大崎の縫製会社社員・吉野タツ代さん（当時二十七歳）、八八年十二月七日に失踪した北方町志久の主婦・中島清美さん（当時五〇歳）、八七年七月八日に失踪した武雄市武雄町の料亭従業員・藤瀬澄子さん（当時四十八歳）の三人であった。三人とも遺体が発見される前に失踪届けが警察に届けられていた。佐賀県警捜査本部は同一犯による殺人事件と見て捜査。当時二十七歳のMさんが吉野さんの交際相手と特徴が一致するとして捜査線上に浮上し、県警が大町警察署で二十七日から四日間事情聴取した。このときは吉野さんとの交際を一切否定したため、Mさんに対する捜査はそれ以上進展しなかった。

Mさんは父親を幼いときに亡くし、母親と妹の三人家族だった。一九八四（昭和五十九）年に窃盗、覚せい剤取締法違反の罪で有罪判決を受けた後、北方町の実家に戻り、十二月ごろから運転手として働いていた。（一）

女性ばかり三人が遺体となつて発見されたことは全国的にも注目され、町はパニック状態に陥った。最初の被害者と二番目の被害者が水曜日に亡くなったため、「魔の水曜日」と言われた。事件後、周辺では夜の外出がほとんどなくなり、集会にも人が集まらなかつたり、ママさんバレーの練習が行われなくなつた。一時、被害者・中島さんの夫が犯人だと噂されたことがあったが、中島さんからそのことを訴えられた警察は八九年春ごろ「遺族の中に犯人はいない」という声明を出した。

三人が同じ場所に遺棄されていたことから同一人物の犯行で、犯人は三人と接点のある人物であると考えられ、事件は長引かないだろうと考えられていた。ところが犯人が逮捕されないまま十カ月近くが過ぎた。現役議員であった田崎さんはどうかしなければという思いに駆られ、近隣住民が少しでも安心できるように、警察、行政、議会や町執行部に対し、警察ができるだけ捜査情報などの情報を発信するように働きかけた。

同年十月三日、Mさんは覚せい剤使用の容疑で逮捕され、大町警察署の留置場（代用監獄）で拘留され二十四日に起訴された。その後も検察官によつて拘置所等への移送手続きが取られることがないまま、十一月二十日に佐賀少年刑務所へ移送されるまで大町警察署の留置場に勾留されていた。この間、十一月十一日にMさんは、女性殺害を認める内容の「上申書」を提出した。（②）

その直後、新聞記者に「上申書」の情報がリークされ、Mさんの自白は「世間」の知るところとなった。新聞に「覚せい剤」、「男」、「二十六歳」、「元運転手」という見出しが出たことから、田崎さんをはじめ周囲の人達はそれがMさんであることを認識した。

しかし、田崎さんは同年十一月二十九日付けの毎日新聞に掲載されたMさんの詳細な「自供」内容に目を通しても納得できなかった。

その理由を田崎さんは一審・佐賀地裁の法廷で以下のように証言している。（③）

弁護士 「証人はその記事（八九年十一月二十九日付け毎日新聞）を見てある感想をもたれたということなんです、すが、どういう感想をもたれたという記憶が残っていますか？」

田崎さん 「はい、Mさんという事は推測できましたので、そうであるならば、山林の遺体の遺棄された場所が住居に近すぎるということでの不自然さと言うのを感じました。それから、三人の女性とも犯人との接触によつてカッツとなつて殺した、頭にきたので殺した、そして吉野さんについてもカッツとなつて殺したというふうにすべて書いてありましたが、そんなことで人を殺すものだろうか。あまりにも短絡的だという印象を持ちました。」

弁護士 「証人の話を聞いて、私たちの当時の新聞を見てみたんですが、確かに見出しで『物証乏しく』と書いて



てあったり、藤瀬さんについては『かっとなって殺した、怒ってこれは犯罪だ、警察に届ける、と言ったのでカツとなって殺した』という文章がありますし、中島さんについても『運転が下手だ、と文句を言ったので頭にきた。その首を発作的に絞めて殺した』。吉野さんについても、『車の窓から写真を投げ捨てた。これが元で罵り合いになり、カツとなって殺した』。そういう動機が、あまりにも不自然だと思われたわけですか。」

田崎さん 「そうです。」

また、田崎さんは二人目の被害者である中島清美さんと面識があり、「気の強い女性」という印象だった。気の強い中島さんがMさんから殴られ、飲酒運転しているMさんの車に黙って乗った事にも疑問を感じた。

田崎さんはその日、Mさんの母親と妹がいるMさん宅を訪れた。息子を犯人にされた母親はどんな気持ちでいるのか、このとき高校に通っていた妹さんは学校へ行っているのかと心配し、慰めるつもりだった。最初、檀家寺が一緒であったためその寺の住職に同行してくれるよう頼んだが、被害者の中島さんと同じ檀家であるという理由で引き受けてもらえず、結局一人でMさん宅に行くことにした。

周囲には警察、マスコミ関係者が大勢集まっっていて、何度も玄関の扉を叩いてやっ和中へ入れてもらおうと、居間へ通され話をした。母親は事件後、娘さんと二人で死ぬことさえ考えたと話し、田崎さんは「大変な目に遭われましたね」と励ましの言葉をかけた。毎日新聞の記事について心当たりはあるかと尋ねると、当然全然分らないとの答だった。母親はMさんから届いた手紙を読ませてくれた。そこには、自分は無実、(母の)顔を見たからもう警察には負けないという内容が書かれていた。田崎さんはその手紙の意味をよく理解しようとして二、三回読むと、涙が出てきて止まらなくなった。警察がやったと決め付け全く自分の意見を聞き入れてくれないことに対する悔しさ、

外界との接触が絶たれた完全な孤独の中にいることを思いやつての涙だった。そして、自分が涙を流したことから、これは「本当にそう思わなければ書けないこと」だと考え、彼の無実を確信した。

Mさん本人に会って真相を確かめる必要があると思つた田崎さんは、母親に「会いに行つてあげましょう」、「とにかく行つてあげんと大変なことですよ。行つてあげましょう。私を連れて行つてください」と言い、翌日佐賀少年刑務所へ面会に行くことになった。(4) 翌日、母親は、田崎さんの家までやつてきたが、その場から動こうとはせずその日は面会に行くことができず、その翌日、佐賀少年刑務所へ面会に行つた。面会の申し込みをして二、三十分待つた頃、田崎さんだけが職員に呼ばれた。建物の二階に上がり通されたのは少年刑務所の所長室だった。コーヒーを出され、所長は世間話を始めた。面会時間がくると困るのに、なぜこんなところに呼び出されるのだろうか」と疑問に思つていたが、所長は「この事件は非常に微妙で、重大な事件だからあんまりへたな事を言わないでくれ」ということを暗に言いたかつたようだ。田崎さんが共産党の議員であることを知つてのことであつた。

二十分ほど話した後、待合室に行くと言ひ面会の時間になった。しかし、所長から言われたことが少なからずプレッシャーになつており、看守(立会人)もいたため、本人に対してアリバイや取調べの様子など具体的なことは聞くことはできなかつたが、Mさんに「新聞にはこう出とるけども、あなたは本当に殺してないのか」と聞くと、「殺してない」と答えた。母親が横から、「殺しとらん。なして、そいぎん殺したて言うかね」と責めるとMさんはあまり話そうとはしなかつた。十分な時間のない中での面会であつたが田崎さんは手紙を見て、Mさんは殺してないことを確信し、そのことを本人の口から確かめることが一つの目的だったのでひとまずその目的は達成された。

素人の手には負えないと判断した田崎さんは、以前から面識のあつた佐賀市の中央法律事務所の河西龍太郎弁護士(5)と連絡を取つた。Mさんの母親を連れて河西弁護士に会いに行き、事情を話すと翌日にMさんに面会に行つてもらえるという返事だった。面会で河西弁護士が、Mさんに取り調べは任意で、必ずしも応じる必要はないこと、

黙秘権があることなどを教えると非常に驚いた様子だった(6)。

河西弁護士との面会后、Mさんは否認するようになり、新聞にも「二転否認」という見出しが出た。河西弁護士との面会はMさんにとって大きな「転機」となったのである。

それに前後して、田崎さんは自ら作成し毎週日曜日に出していた『北方民報』というミニコミ紙の十二月三日号に、Mさんが母親に宛てて書いた手紙の一部を直筆のままを掲載した。北方民報は周囲の家庭などに配られるものであったが、西日本新聞の記者の目に留まり、その日の夜に取材にやってきた。六日には記事となり、その日からテレビ、新聞などマスコミ各社が田崎さんのところに取材に来るようになった。

このように、『北方民報』を出したことによって、反応があったことから、田崎さんはこのような努力は必要だと感じた。(7)河西弁護士の助言で取材を断るようになったが、中央弁護士事務所で共同記者会見が開かれた時には田崎さんも同席しマスコミに対し意見を述べた。

捜査当局は「上申書」を得ていたので裏付けさえしてしまえば、すぐに逮捕起訴できるはずであった。そうしなかったのは、警察は無理してそれを書かせているため自信がなかったこと、裏付けがなかったこと、秘密の暴露がないことが理由ではないかと、田崎さんは考えている。そして結局犯人が捕まらないまま五年、十年と時間だけが経っていった。

田崎さんはその後、七期途中まで議員を務め一九九八(平成十)年九月の北方町長選挙に出馬し、現職の町長と争った。投票総数の四割を超える二、九五〇票を得たが約千二百票差で落選した。それを機に第一線での政治活動からは身を引いた。通算七期二十七年の議員生活であった。

## Mさん逮捕

最初の被害者である藤瀬さんの時効成立まで一ヶ月をきった、二〇〇二年六月十一日、佐賀県警は吉野さん殺害容疑でMさんを逮捕した。事件発生から十三年近く新しい証拠も何も見つけることもないままの逮捕だった。当時、Mさんは二〇〇一年鹿児島県で起こした窃盗未遂事件のため、鹿児島の刑務所に服役中だった。

逮捕前、三月十八日に田崎さんは鹿児島市内の刑務所で服役中のMさんに面会に行った。この時が十数年ぶりの再会だった。その後田崎さんには二通の手紙が届いた(8)。三月十九日に出された手紙には、二〇〇二年三月五日、六日に佐賀県警の刑事二人が、鹿児島の国分署に来て北方事件、鹿児島での事件について聞いていったこと、そして「大峠の事件は話す事もなかったのでは」と話してはしませんでした」と書かれていた。二十八日に出された手紙には「吉野さんとの付き合いはありましたが、中島さん、藤瀬さんは全く知りません」と書かれている。

新聞各紙はMさん逮捕を大きく取り上げ、佐賀新聞は号外を出した。しかし共同通信など一部の記者は疑問を持ち、Mさんの母親に会いたいと田崎さんの元を訪ねた人もいた。田崎さんは、当時マスコミから逃れるため北方を離れ、娘さんの夫の実家がある伊万里市に住んでいた母親と記者を引き合わせたこともあった。母親はあまり会いたくない様子だった。このように警察の捜査の方法には少しは疑問を持っている人もいたが、その一方で佐賀新聞などは初めから犯人は彼に間違いないという「犯人視」報道をしていた。田崎さんのところへ取材に来るマスコミは、警察発表だけでは不十分なのでその対極の意見として警察に批判的な声を聞きたいという人が多かったので、警察のやり方を多少非難するような言い方をしていた。田崎さんはMさんの逮捕後、佐賀新聞の取材に対して「確実な証拠が出てきた上での逮捕なら県警に『お疲れ様』と言いたい。しかしイチかバチかの駆け込み逮捕で十三年前の繰り返しになることは許されない」とコメントした(9)。

逮捕後の取調べでは、Mさんは一貫して容疑を否認していたが、七月二日に吉野さん殺人罪で起訴、藤瀬さん殺害で再逮捕、さらに七日藤瀬さんの殺人罪で時効六時間前に起訴し、九日には中島さん殺害で逮捕、三十日に起訴

された。警察は、「とにかく逮捕したということで、その答えにしてほしい」(10)、「これまで収集した証拠により十分な確証を得た」(11)と逮捕に踏み切った理由を一切明らかにせず、捜査当局は「決定的な新証拠はない」(12)と自白や物証など直接証拠を欠いたまま起訴したことも明かにしている(13)。控訴審判決でも、「急遽被告人(当時)に対し強制捜査・起訴に踏み切った背景に何らかの捜査の進展があったかどうかは記録上不明である」としている。このように、この時Mさんを逮捕・起訴したこと自体無理なことであつたと言つても過言ではないだろう。

Mさんは、北方事件発生以前に覚せい剤の使用や窃盗などの前科があつたこともあり、「あそこの息子がそんなことをするはずがない」という擁護する声も地元からは出なかつた。むしろ「彼ならやりかねない」というような声さえ聞かれた。

Mさんの弁護にあたつたのは国選弁護士だつた。武雄市に事務所を開いている浜田愼弁護士が主任弁護人を務め四人からなる弁護団が構成された。一人の被告に複数の国選弁護士が選任されるのは佐賀県内初のことだつた(13)。それが無罪を獲得する上で非常によかつたのではないかと田崎さんは語る。公判はほぼ週に一度行われていた時もあり、弁護団の活動は大変なものだつた。

二〇〇二年十月二十二日、佐賀地方裁判所で三件同時に初公判が開かれた。裁判の中でもMさんが三人の殺害を認めることはなかつた。

裁判で検察側が主張した事件の内容は以下の通りである。(15)

#### ■藤瀬澄子さん殺害事件

一九八七年七月八日、Mさんは勤務後、武雄市内の飲食店で一人、酒を飲んだ後自分の車で市内を走っていた。

一方、藤瀬さんは午後九時三十五分ごろ仕事仲間と別れ、一人で歩いて帰っていた。Mさんは藤瀬さんに気付き、言葉巧みに声をかけ、助手席に乗せた。人目につかない北方町大崎の山中まで車を七、八キロ走らせた。覚せい剤の使用場所として以前から熟知しており、細い山道に車を乗り入れ暴行した。藤瀬さんが「警察に言う」と言い出したため、Mさんは逮捕されることを恐れ、殺害を決意し、車の中で首を絞め殺害した。

殺害後、バッグの中の財布から約二万円を抜き取り、死体を捨てる場所を探した。大崎の白仁田地区を探したが、適当な場所が見つからず殺害現場を通過後、窓から藤瀬さんのバッグを捨てた。その後自宅のある大峠地区に人が出入りせず、夏は草木が生い茂る雑木林があることを思い出し、死体が発見されにくいと考え、死体をその雑木林に投げ捨てた。

Mさんは翌日勤務先を欠勤、殺害に利用した車をそのまま使うのは気持ち悪いと感じ、四ヶ月前にローンで購入したにもかかわらず、同月二十日に売却した。殺害後さらに覚せい剤を乱用するようになった。家人の前でも注射したり、些細なことで腹を立て家族に暴力を振るうようになったため、母親が警察に相談。八七年十月十五日、覚せい剤取締法違反で逮捕され、同年十二月十六日に実刑判決を受け、佐賀少年刑務所に服役した。

#### ■中島清美さん殺害事件

八八年九月十三日、刑務所を仮出所した後、自宅に戻りダンブカー運転手として働くようになった。同年十二月七日、仕事帰りに焼き鳥屋で飲酒した後午後七時過ぎに店を出て車で帰った。中島さんは、毎週水曜日自宅から約八百メートル離れた北方スポーツセンターで地元婦人会のミニバレーボールの練習に参加しており、同日午後七時二十分ごろ徒歩でスポーツセンターに向かい、北方中学校の前で帰宅途中のMさんとすれ違った。

Mさんは中島さんから呼び止められ下車。「車にぶつけられ、体に当たった」と中島さんに文句を言われたことに

激昂し、車を接触させた覚えはないと反論、中島さんの顔面を手で殴った。中島さんはますます怒り出し、Mさんが飲酒運転していることにも気づき強く文句を言い出した。Mさんはこのままでは周辺住民に気づかれ騒ぎになると思い、その場を離れるため「家にいつて話をしよう」と誘い、中島さんを助手席に乗せた。

Mさんは人気がないところに連れて行つて脅し、文句を言わせないようにしようと、大峠地区に向かった。車が山中に向かつていたため、中島さんが「どこに行くかね。どこさん連れて行くとね」と大声をあげられ、運転をさせないように腕をつかまれた。

中島さんは興奮しており、このまま家に帰すと、警察に通報され、飲酒運転や接触事故、さらには中島さんへの暴力を取り調べられ、再び刑務所に入れられると考えた。また、交際中の女性とも別れなければならなくなると思い、殺害を決意した。

Mさんは道幅の狭い山道に乗り入れた後、助手席の中島さんの首を絞め殺した。

藤瀬さんの死体が一年経つても発見されていないこともあり、今回も同じ雑木林が最適であると思い、同じ場所に捨てた。中島さんの手提げバッグも同じ雑木林に捨てた。

中島さんの家族は、ミニバレーに出かけたきりで、夜になっても帰ってこなかったため、翌八日未明に大町署に家出人捜索願を出した。

#### ■吉野タツ代さん殺害事件

Mさんは吉野さんについて結婚後に大峠地区の夫の実家に住むようになってから、通勤途中にその姿を見かけるようになった。

八八年の仮出所後、一人の女性との交際だけでは物足らず、他の女性とも関係を持ちたいと考え、手当たり次第

に誘いの電話をかけていた。同年十二月Mさんは吉野さんが夫と別居していることを知り、誘いの電話をかけ交際が始まった。

翌八九年一月上旬ごろ、吉野さんは妹に男性との交際を打ち明け、家族構成や使用している車などMさんの特徴について話していた。

同年一月二十五日、Mさんは午後六時十分ごろ帰宅。この日は交際中の女性が勤務先の新年会だったため、吉野さんに電話をかけた。二人は午後八時までに、武雄市のボーリング場で落ち合い、北方町のホテルに向かう途中、車に飾っていた同僚女性の写真を見つけられ、「あんた別に女がおるとやる」と詰め寄られた。Mさんは「おらん」と答えたが吉野さんと口論となった。

その後大峠地区の山中に向かったが、その間も女性問題をめぐり口論を続けた。大峠地区を過ぎ北方町志久の路上まで来たところで、吉野さんは写真を手にし「この女はだいいね。別れんしゃい」と助手席の窓から車外に投げ捨てた。Mさんは激昂し道路わきに車を停車。路上に落ちた写真を拾いにくくとも殺害を決意した。車に戻ると直ちに殺害行為に及び抵抗する吉野さんの首を絞め、鼻や口を手でふさぎ殺害した。藤瀬さんや中島さんの死体が誰にも発見されていないことから、吉野さんの死体も同じ場所に捨てようと考え、雑木林に向かい死体を投げ捨てた。

帰り道、助手席に吉野さんのシオルダーバッグがあることに気づき免許入れを車窓から投げ捨て、財布の中に六千円あるのを見つけて抜き取った。メモ帳や紙切れなどを出した後車窓からシオルダーバッグを投げ捨てた。化粧品のクレジットカードや紙切れは路上に投棄、メモ帳は百貨店の会員証と一緒にJR北方駅近くのゴミ箱に捨てた。

これはMさんが一九八九年に提出した「上申書」の内容に沿ったものである。吉野さんと交際していたことは供



述の中で認めているが、藤瀬さんと中島さんとの関係があったことの直接的な証拠はなく、田崎さんはMさんの「自白」は警察の誘導によるものだと考えた。

田崎さんは一番の裁判中、国民救援会(16)の全国集会や九州ブロックでの会議の際にも、この北方事件の問題を取り上げたことがあった。しかし、田崎さんの支援活動を禁止することはなかったが、守る会の設立など具体的な支援活動を行うことはなかった。国選弁護団との連携がうまくいかず、情報を提供してもらうことができなかったのがその理由であった。救援会として支援に乗り出すには、十分な資料を集め無罪という確証があることが前提であったため、情報が無ければ動けないという判断だった。それでも、救援会で裁判の証言に基づいて現地調査を行い、「現地調査、裁判の報告書確認調査」という集会を行った。公民館で開かれ三十人ほどが集まったが、本格的な支援活動には発展しなかった。共産党の議員からも「あまり関わらない方がいい」と言われた。このように、田崎さん以外にMさんを支援する個人・団体はなく、一人で行動しなければならぬ状況下であり、これは無罪が確定するまで変わることはなかった。

二〇〇四年九月十六日の公判では八九年に提出していた六十五通の「上申書」を「令状主義をせん脱した違法な取調べ」として証拠不採用の決定が下された。長時間におよぶ取調べや、黙秘権・任意の取調べで拒否できるという告知が不十分だったこと、自白を迫る追及的な取調べが執拗になされていたことなどが認められたのだった。

二〇〇五年五月二日に田崎さんはMさんの元へ面会に行っている。その時にMさんは「無罪になれば自由になれる。すぐに刑務所の荷物をまとめたい」と話した(17)。

二〇〇五年五月十日、検察が藤瀬さん殺害で無期懲役、中島さんと吉野さん殺害で死刑を求刑したのに対し、証拠不十分としてMさんに無罪判決が言い渡され、即日釈放された。判決当日、傍聴していた田崎さんは、「無罪」を掲げている(18)。「無罪」と書いた紙を用意し廊下のいすの下に隠していた。判決の主文を読み終わった後、弁護

団の誰かが出てくればよかったが、誰も出て行かなかったため、田崎さんが出て行った。

無罪という判決が出てから、各新聞社は二〇〇五年五月十二日付けの社説で、「逮捕に無理があった」（朝日新聞）、  
『疑わしきは無罪』はルール（毎日新聞）、「捜査のあり方に猛省を迫った」（読売新聞）、「無罪の重み受け止めろ」  
（西日本新聞）など、警察、検察を厳しく非難した。

一審で無罪判決が出た翌朝、Mさんは福岡に足を運びスポーツ新聞で仕事を探した。本人は福岡高裁で裁判があるので福岡のほうで都合がいいからと佐賀ではなく福岡で就職した理由を語っていたが、実際は佐賀県内では名前が知られているため仕事がなかったからではないかと田崎さんは考えている。Mさんは現在も福岡県内で建設作業員として働いている。

また、この日国民救援会は、佐賀地方検察庁に対し、「控訴しないことを求める申し入れ」という嘆願書を作成し佐賀地検に提出したが、検察は五月十八日に控訴した。

二〇〇六年五月十六日から始まった控訴審では、検察側がMさんの当時所有していた車に飾られた写真から、中島さんと同じミトコンドリアDNA型の付着物が見つかったとして、新たに証拠申請した。これは事件が発生した八九年一月、写真の指紋を採取するために使用したゼラチン紙から検出されたものであった。検察は、写真に触れた可能性のある捜査員の中にはこのDNA型を持つものはおらず、さらに中島さんのミトコンドリアDNAは日本国内でミトコンドリアDNAを研究する医師など十人のもつデータの中に一例もないという希有なものであり、中島さんがMさんの車に乗ったことがある証拠であると主張した。しかし、ミトコンドリアDNAは母系遺伝するもので同じ型を持つ人も少なからず存在している。また、後にミトコンドリアDNA型の鑑定が行われることを考慮した取り扱いがされていたとはいえず、中島さんとMさんを結びつける証拠とは認められなかった。（19）

控訴審中には、国民救援会福岡支部の事務局長など救援会の関係者二、三人が傍聴に来ることがあった。

二〇〇七年三月二十日に福岡高裁で無罪判決が出た。田崎さんはこの時も「無罪」、「不当判決」、「控訴棄却」と書いた紙を用意していた。Mさんはその日も仕事に出ていた。二週間後の四月二日福岡高検が「適法な上告理由が見いだせなかった」(20)として上告を断念したため、三日午前零時でMさんの無罪が確定した。統計が残る七八年以降、死刑を求刑され一、二審とも無罪が言い渡され、確定したのは初めてのことだった(21)。この時一九八九年の事件発生から十八年が過ぎていた。この間、田崎さんは様々な支援活動をたった一人で行ってきたのだった。

## 【注】

### (1) 一審(佐賀地裁) 判決文より

(2) 大町署の取調室は留置場に隣接する間口約一九五センチメートル、奥行き約三百五十五センチメートルの狭い部屋であった。Mさんが身柄を拘束されていた部屋は独居房で、他の被疑者と接触できないようにされており、十一月十八日に覚せい剤取締法違反罪で起訴後選任された国選弁護人と初めて接見しただけで、そのほかには外部との接触が一切ないままほとんど孤立化した状態に置かれていた。この間の取調べは、覚せい剤取締法違反罪の公判審理を円滑にするためのもので、全く関係のない殺人罪の取調べは任意の取り調べである。つまり、覚せい剤取締法違反で起訴後勾留されていたMさんは、殺人罪についての取調べを拒否することができ、取調室に入室した後でも留置場に戻ることができる。しかし、取調官は「任意の取り調べである」と告げたという以上に、取り調べの受忍義務はなく、取調べを拒否したり、取調室を退出することを要求することができるといふことを告げたり、具体的に説明することはなかった(控訴審判決より)。さらに、十月二十六日から十一月十八日までの二十四日間連続して取調べを続けた。これは令状に基づく起訴前の勾留期間である最大二十三日を超えている。この間一日十時間以上取調べられたり、午

前零時を過ぎて深夜に及ぶことも少なくなく、最も長い日では取り調べ時間が十五時間を越えることもあった。下を向いていると顎に手をやり取調官のほうを向かせたり、机を叩いたりされたことがあったこと、食事を取らせずに取調べを続けた日があったことも裁判で事実として認められている（控訴審判決）。こういった任意の取り調べの限度をこえ、自白を迫る威迫的な取り調べによつてMさんが偽の自供をさせられ、三人を殺害したことを認める「上申書」を提出させられてしまうのは十一月十一日だった。後にこの「上申書」は取調官の誘導で書いたものだともMさんは裁判で証言している。

(3) 田崎さんへのインタビューより

(4) このとき田崎さんは母親がまだ一度も面会に行っていないと勘違いをしていたため、面会に行くことを強く勧めた。しかし、実際はすでに二度ほど面会に行っていたため、お母さんはあまり気が進まない様子であった。後に、強く勧められたため、「今さらすでに行つたとは言えなかつた」とお母さんに打ち明けられている。田崎さんも「手紙に面会に来たことは書いてあつたがすぐに理解できなかつた」と言っていた。

(5) 当時佐賀市で弁護士活動をしていた。暴力団・宮地組と渡り合つたという経歴があり、なかなか勇気のあつた弁護士だと評判だった。

(6) この時、田崎さんは同行しておらず面会の時の様子は後で一審での河西弁護士の証言で知る。

(7) 田崎さんによると、その西日本新聞の記者は『北方民報』を紙面に掲載した後、大町警察署から出入り禁止とされた。

(8) 二〇〇二年六月十二日付朝日新聞、二〇〇二年六月十四日付佐賀新聞

(9) 二〇〇二年六月十四日付佐賀新聞

(10) 二〇〇二年六月十二日付佐賀新聞

- (11) 二〇〇二年七月十日付佐賀新聞
- (12) 二〇〇二年七月三十一日付佐賀新聞
- (13) 二〇〇二年七月三日付佐賀新聞   なお記事には「否認事件が増える中、状況証拠から積み重ねてから立証していく手法はいくつかの事件で試みられており、(以下略)」ともあるが、北方事件の場合、Mさんと藤瀬さん、中島さんの関係があったという証拠はなかった。
- (14) 二〇〇二年十月二日付佐賀新聞
- (15) 二〇〇二年十月二十三日付佐賀新聞、検察側冒頭陳述要旨より
- (16) 正式名称は日本国民救援会。一九二八年創立、千葉・野田醬油争議の弾圧犠牲者の救援をきっかけに設立。その後、治安維持法によって弾圧された人々の救援活動に奔走。戦後は人権と民主主義を守るために運動を行い、現在は冤罪事件などの事件支援をはじめ様々な活動を行っている。  
(国民救援会ホームページ「救援会の紹介」より <http://www.kyuenkai.gr.jp/shokai/shokai.html>)
- (17) 二〇〇五年五月十日付朝日新聞
- (18) 資料写真
- (19) 二審(福岡高裁)判決より
- (20) 二〇〇七年四月三日付朝日新聞
- (21) 二〇〇七年四月三日付朝日新聞

### 第三節 無罪確定後

## 北方事件が残したもの

この北方冤罪事件の落とした影というのは非常に大きかった。地域社会の人間関係を壊してしまった。そして事件後近隣住民は事件のことについてあまり語ろうとはしない。

なによりもMさんと家族に与えた苦痛は計り知れない。一審、二審と争い無罪が確定したが、近隣の住民は真犯人が捕まっておらず、警察の捜査のやり方が悪かったということもあつたため、「灰色」として見ている人も多いのではないかと田崎さんは言う。無罪が確定したにも関わらず、Mさんと家族はこの事件を背負って生きていかなければならないのが現実である。

富山の痴漢冤罪事件など他の事件では、冤罪被害者が表に出て冤罪の体験を伝えるなど何らかの活動をする事は珍しくないが、Mさんは現在までそのような活動は一切行っていない。田崎さんともあまり好んで会おうとはしない。おとし十二月から一月にかけて佐賀大学病院に股関節手術のため入院したとき、見舞いに来てくれるよう誘ったが、訪れることはなかった。

その背景には、いくつかの要因があると考えられる。田崎さんは、「仕事が忙しいせいもあるだろうが、冤罪の体験を話すよう勧めたことが重荷になつているのかもしれない」と語った。「マイナスイメージ」が多いこともその理由として挙げられるだろう。覚せい剤の使用の前科、夫子があり遠戚である吉野さんとの交際を認めたことなどがそれにあたる。前述したようにMさんは現在、身をひそめるように福岡で単身生活している。

Mさんの妹は北方を離れ結婚し四人の子供をもうけており、母親もそこに身を寄せている。田崎さんは、Mさんの母親が北方を離れることを知り、「ここで頑張つてほしい。ここを空けると、いかにも逃げたようになって世間の印象が悪い」と伝えたかったが、それまでの想像を絶する苦痛を思うと言うことはできなかった。無罪確定後も、いまだ「Mさん＝犯人」という図式が払拭されておらず、しょうがないという気持ちだった。家は電気ガスでこそ

とめてあるが、そのまま残っている。「このまま野ざらしになつていくのではないか」と田崎さんは語った。

佐賀県警のことを「さば<sup>けんけい</sup>県警」(さばけない県警)と揶揄することがある。これは、佐賀県警が事故死として判断し処理した男性の水死体をめぐり、長崎県警が九九年に連続保険金殺人として立件した事件(1)や、杵島郡白石町の須古小学校で二人の女性の遺体が見つかった須古小事件をはじめ、北方事件が起こるまでに非常に狭い地域の中で計四人の女性の遺体が発見されたが、解決できず迷宮入りしてしまつた(2)という過去の失態があるためである。このような全国的に注目を集めた事件で成果を挙げることができなかった県警は、汚名返上のために時効を目前にしての起訴に踏み切つたという指摘もある(3)。さらに、北方事件では、証拠のガーゼを紛失したり取り調べ時間が実際より早く終わつたように内部報告書を改ざんしたりと不祥事が相次いだ(4)。田崎さんは「佐賀県警は人権感覚も希薄で、科学的な捜査という点で非常に数段劣つていのではないか。真相、事件を解明する力、技術的な点において、努力すべき点があるのでは」と考えている。無罪確定後、県警は新聞各紙から批判され、さらに評価を下げる結果となつた。

### 無罪確定後の田崎さん

先に触れたように、すでに田崎さんは議員を退職しているが、田崎さんは現在でも冤罪事件に関心を持ち、シンポジウムなどにも積極的に参加している。二〇〇七年に福岡県北九州市で開催された引野口事件(5)のシンポジウムに参加した。フロア発言の際、田崎さんは「佐賀からも来ている」ことをアピールするために発言した。この時には、参加していた弁護士から「北方事件からも教訓を得ている」という意見があつた。田崎さんは北方事件も教訓を与えているのだと感じた。

二〇〇七年十二月の佐賀県議会では警察行政のことについて取り上げてもらった。共産党の武藤議員が県警として捜査の反省はないのかという論点を提示し議論してもらったが、再び北方事件のようなことが起こらないよう取り調べの可視化などを検討したいという答弁がされただけであった。

田崎さんは、佐賀県警の捜査方法や姿勢について批判的である。「上申書」を得ておきながら時効直前まで起訴できなかったこと、裁判で証人として出廷した取調官が「嘘の証言」をしたことがその理由である(6)。「警察、検察は自分たちの面子を保つために、犯人をでっちあげる。M君という一つの悪いイメージのあるやりそうな人物だということ、なにかも押し付けて、塗りつぶしてしまふ。権力犯罪というような感じがしますよね。」「警察は彼が犯人だというふうには確信持たなかったと思う。で、上申書を書かせて、自白したんだから、そこでもう起訴できるはずなのにそれもしなかった。そうすると私は、裏を返すと警察は彼が犯人じゃないことをよく知っていると思うんですね。そうすると時効まで来るでしょ?しかしこのまま時効で終わらせちゃあ県民が納得しない。で、この際に彼に擦り付けて彼に犯人という刻印を押してあの世へ行ってもらおうと、そこまで考えた。これはほんとに大変な権力犯罪ですよ。そういうふうには合理的に考えていきますとね、そういう筋道にしかでてこない。」と語った。

また、北方事件を通して裁判をありきたりなもので終わらせないために、多くの人が裁判を傍聴したり、集会や署名活動を行うことで、裁判官に社会から関心が向けられていること意識させ「いかに裁判官にやる気を起こさせるか」が重要だということを教訓として得た。北方事件では「上申書」を証拠採用するかどうかなどの節目の裁判で満員となった以外は全体を通して傍聴者は多いとは言えず、地元の人達は集まって裁判を傍聴に行くこともなく、傍観している状態だった。田崎さんは「警察からにらまれたくない、関わりたくないというのが正直なところではないか」と感じた。またMさんの場合、事件前に窃盗や覚せい剤で逮捕されていたことを近隣住民は知っており、Mさんの犯行に疑問を持たなかったことも支援活動が行われなかった原因の一つと考えられる。



そして、北方事件でMさんを支援したことが田崎さんの中で一生のうち最も「手ごたえのあった出来事」として位置づけられている。田崎さんは「今になって考えてみると、私はやっぱり彼に接することができてよかったなと思います。そして非常に払った犠牲は大きいですけど、やはり私が河西弁護士に取り次いだことはよかったし、結局それが彼を最終的には犯罪人にさせずにすんだのかなど。最終的に彼を死刑にさせずに済んだ。死刑にさせるということになる、彼は四番目の被害者ですからね。だから、そういう意味では、やっぱり冤罪ということがあるんだよということを多くの人たちが知ること大事じゃないですかね」と語った。

田崎さんの妻・アイコさんは、「悪いことは悪いと権力に対しても言える立場にあったということはよかったと思います。普通の人は言えないですよ。ほんとに信念を持って、議員生活してたことがやっぱりこういうことに繋がっていったんじゃないかと思えますね。」と語る。保守系の議員仲間から「田崎さんえらか」と言われたこともあった。応援しようと思っても応援できないもどかしさを持っている人もいたと考えられる。北方事件での支援は、権力に対しても意見できる議員という立場にあり、他人に対し深い同情の気持ちを持つことのできる田崎さんだからこそできた行動であったと考えられる。このように田崎さんの「たった一人の支援」活動は、北方事件が冤罪事件であることを立証するために、大きな役割を果たしたのであり、その意味で無罪獲得のキーマンであったということができよう。

田崎さんの願いは、この事件から教訓を汲み取り活かすことだ。そのためには、この事件の当事者であるMさんが体験を語る必要がある。冤罪というえがたい体験をしたMさんが体験を話し多くの人に知らせることで、再発の防止をすることにも繋がっていくからだ。田崎さんは冤罪事件があることを、免田事件などを通じて知っていた。Mさんの手紙を見せてもらった時、逮捕された人が無実を訴えることも有りうるのだと考えたのは、権力はそういうことをやりかねないということを多少でも知っていたからだろうと考えている。しかし、Mさんは田崎さんが

働きかけても自分の体験を他者に発信する行動はしていない。Mさんが背負った傷は我々が想像する以上に深いものであることの現れだと言えるだろう。田崎さんは、被爆者が長い間口を嚙んでいたが、次第にどうしてもしゃべらないといけないという気持ちになっていったように、Mさんが真実を語ろうという気持ちになってくれることを期待している。

## 【注】

(1) 一九九九年、息子に睡眠導入剤を飲ませて水死させたとして長崎県警に逮捕された佐賀県鹿島市の女性が、七年前に死亡した夫の殺害も供述し、逮捕された。佐賀県警は海に転落して溺れた事故死としていた。(二〇〇六年一月二十七日付朝日新聞)

(2) 須古小事件とは、一九八〇年六月杵島郡白石町の須古小学校のトイレの便槽から、失踪していた当時十二歳の女子中学生と二十歳の女性の遺体が見つかった事件である。この被害者二人の母親たちは時期は違うものの、同じ白石町のクラブに勤めていた。また、八一年には北方事件の被害者・吉野さんと同じ縫製工場に勤務していた二十七歳の女性が、八二年には小学五年生の女兒(十一歳)が絞殺され発見された事件が起きている。これらの殺人事件は国道三十四号線付近の狭い範囲で起こっていること、北方事件も含めて計七件の殺人事件が同一犯である可能性が指摘されている。(ノンフィクションライター上條昌史著「佐賀『北方事件』女性7人連続殺人の白と黒」『新潮45』二〇〇八年二月号「新潮社・二〇〇八年二月」五二頁)

(3) 二〇〇五年五月十二日付読売新聞 社説

(4) 二〇〇三年六月二十七日付佐賀新聞、二〇〇三年十二月二十六日付佐賀新聞

(5) 引野口事件とは、二〇〇四年三月二十四日夕刻、北九州市八幡西区引野口でおこった火事の焼け跡から死

体が見つかり、被害者の妹・片岸みつ子さんが別件で逮捕された事件。警察は片岸さんの同居者A子に片岸さんの動向を報告させる取調べを続け、A子の「事件の告白を聞いた」と言う供述だけを元に、物証も目撃証言も動機もないまま片岸さんを殺人罪で逮捕、検察が起訴したが、二〇〇八年三月五日福岡地裁小倉支部は無罪判決を出した。(引野口事件ホームページ <http://www.hikiniguchi.com/>)

(6) 取調べ状況においてMさんと警察の主張は食い違っている点がある。まず、「上申書」について、Mさんは裁判で取調官の誘導によって書いたと主張している。また取調べ中に暴力を振るわれたとも主張し「あざは残っていないが、軽く叩かれたのではない」と証言した。一方で、捜査員は供述の誘導や暴力を否定した。またMさんが、睡眠時間や食事をまともに取ることができない日もあったと主張したのに対し捜査員は「健康には配慮した」と主張した。その他にも黙秘権や任意であることの告知をめぐつても食い違いが見られた。(二〇〇四年一月二十三日、一月六日、二月二十日、三月五日付佐賀新聞)

## 第二章 田崎以公夫さんのライフ・ヒストリーの考察

本章では田崎さんのライフ・ヒストリーを考察する。田崎さんのそれはパーソナリティの形成をした戦前期・その変容が図られた戦後、そして北方事件以降の三つに分けられる。

まず戦前期は、兵隊に憧れを抱き、軍隊学校の募集があれば積極的に応募したように、国家の考え方を受け入れ軍国主義的思想を持っていた。それと同時に、朝鮮人に対する暴行を目撃したことがきっかけで他人、特に弱者に

対する同情の気持ち（ヒューマニズム）という、軍国主義的思想とは対極の感情が育った。この背景には、田崎さん自身「食べ物をも十分に食べられていたから気持ちにゆとりができた」と語ったように、自分の事だけでなく他人の事も考えるだけの余裕があったためと考えられる。以後、このヒューマニズムは田崎さんのパーソナリティの根底に存在し続けている。

次に、敗戦により軍国主義的思想・目標が否定され、田崎さんの中でも次第に失われていく。田崎さんは敗戦を経験したことで虚脱感を感じ、「これからどうやって生きていくか」ということを考えたと言った。これは田崎さんの中で軍国主義的思想が排除され、田崎さんが新たな精神的拠りどころを求めていたことの表れと考えられる。その後、講演会・ミーデーへ参加し、浪人時代・大学時代に共産党の思想に触れた。また、浪人時代に参加した講演会が突然中止されたことで社会や権力に対する矛盾を感じ、ミーデーに参加した時に人々の暴力行為を目撃し暴力に対する違和感をもったことが特に大きな要因となつて、暴力の否定（平和主義）、国家や権力に対する抵抗的姿勢（人権尊重・権力批判）などを受容していった。共産党入党後、これらの思想は強固になった。この間、幼いころから培われていたヒューマニズムはさらに増幅していった。

そして、北方事件の支援では田崎さんの準拠集団（reference group）である共産党を否定・対立することはなく、その準拠枠を超え、〈独立した個人〉として行動した。準拠集団とは、個人が他人を評価したり、意志や態度を決定したりする場合などによりどことする集団である（1）。前述したように、共産党の組織である国民救済会は組織的な支援を行わず、同じ共産党員からも「関わらないほうがいい」と忠告されていた。田崎さんの支援活動は共産党の「支援しない」という方針に従わない行動であり、準拠集団を超えた行動であつたといえる。他に支援活動がなく、一人で行動するしかない状況で、共産党という〈準拠枠〉を超えた一個人として行動したことで、共産党員として身につけた思想や知識（冤罪の存在）、行動力が最大限に発揮され、幼いころから培われたヒューマニズムと

相まつてたつた一人で強力な支援活動を成し遂げたと考えられる。

ところで、アメリカの心理学者エリック・H・エリクソンによれば、老年期における支配的な対立命題および心理社会的危機は「統合（同調要素）対絶望（失調要素）」であるという。老年期は人生行路の最期ということもあり、「絶望」がまず頭に入ってくるが、「統合」はこの命題から熟して生まれる人間的強さである。「英知」を要請する。「英知」とは死そのものを目前にしての人生そのものに対する超然とした関心である。(2) また、老年期の儀式化（人と人との間で行われるインフォーマルで定型化され、意味のある間隔において繰り返される相互交渉）は「哲学的なもの」で、その対極の儀式的な危険はドグマティズムである。これは不当な権力と結びついた時に威圧的な正統（オースドクシー）ともなりえる擬似統合ともいえる。老年期においての身体的・精神的な様々な危機の中でこの「統合」もまた危機に襲われる。しかし、人間は好条件下にあればその潜在能力を発揮し過去の発達段階での統合的経験が実を結ぶ。(3)

田崎さんは、ドグマティズムに陥ることなく、準拠集団で身につけた知識・行動を普遍的なものにまで高めた。つまり、準拠集団での行動力・政治力はその枠を超えて普遍主義的なものとなり、「英知」化されたのである。そして、知識・行動とパーソナリティの根底にあったヒューマニズムが統合され、北方事件の支援で最大限に生かされ機能したと言える。田崎さんのこれまでの人生は、準拠集団である共産党が一時の勢いを失っていることもありすべてが順調だったわけではないが、老年期において準拠集団の活動で得た知識・行動が「英知」となり、それがパーソナリティの基底あったヒューマニズムと「統合」され充実したものであったと考えられる。

# 【注】

(1) 準拠集団 [reference group] とは、態度や意見またパースペクティブの形成と変容において、自分を関連付

けることによって影響を受けるような集団のことである。一般に家族、友人集団、近隣集団など身近な所属集団からなることが多い。これらの集団の規範や価値との関係において自らの準拠枠を形づくり、それに基づいて自己の態度などを作り上げることになる。また、現在は所属していないがかつて所属した集団、あるいは将来所属したい集団、つまり非所属集団も人々の態度形成に影響を及ぼしている。この概念は一九四二年にハイマンによってはじめて用いられた。(森岡清美、塩原勉、本間康平編『新社会学辞典』〔有斐閣・一九九三年〕七二二―七二三頁)

- (2) E・H・エリクソン (村瀬孝雄・近藤邦夫訳) 『ライフサイクル、その完結』〔みすず書房・一九八九年〕七九―八〇頁

- (3) E・H・エリクソン (村瀬孝雄・近藤邦夫訳) 『ライフサイクル、その完結』〔みすず書房・一九八九年〕八四―八五頁

### 終わりにかえて―残された課題―

世間からすればこの北方事件はMさんの無実が証明され、すでに時効を迎えているため終ってしまった過去の事件となつてゐるだろう。しかし、この事件は「Mさんの無罪が証明されてよかった」ということで終れない。もちろん被害者の遺族の方々の家族を失つた悲しみ、怒りは今も消えることはないだろう。そして本来ならその感情をぶつけるべき犯人がいらないということも、想像を絶する苦悩を与えているのは明らかだ。無実の罪で逮捕されたMさんもこの事件により殺人犯のレッテルを貼られたため、無罪が確定した後も殺人犯として見られ人生が狂ってしまったと言つても過言ではない。

さらに、Mさんを支援した田崎さんにとってもこの事件はまだ過去のものではない。田崎さんの元には、裁判中から無罪が確定した後も、折に触れて脅迫めいた葉書が届いている。消印は佐賀市や武雄市など北方町周辺で、葉書には「犯人はMしかない」、「共産党はこんな犯罪者を支援するのか」などといったことが書かれている。またこれらの葉書には「須古小で起こった事件もあいつがやった」とも書いてあるが、須古小事件が発生した時Mさんはまだ十代後半であり田崎さんに届いた葉書に書いてあったように、これらの事件とMさんを結びつけるには無理がある。須古小事件やそれと同時期に起こった二件の女性殺害事件を関連付けるのであれば、犯人はMさんよりも年上の人物であると考えられる。また、死体遺棄現場が人目につく可能性が高い場所であることから、「死体を隠す」という意図があまり感じられないため、犯人は「早く見つけてほしい」「見つけて騒いでほしい」という強い自己顕示欲をもった人物であるとも考えられる。

この事件の関係者にとつて時効はない。Mさん一家と田崎さんにとつても「真犯人」が見つからない限りこの事件が終らないのが「現実」である。

本稿を閉じるにあたって田崎さんに取材する中で、筆者が考えたこの事件における問題点に触れておきたい。

第一に、自白偏重の捜査である。この事件ではMさんの逮捕、起訴に踏み切るにあたって、「上申書」以外の決めた手となる証拠はなかった。自白を得るため、長時間にわたる取り調べや暴力行為などにより、自白を強制するような取調べが行われたことも裁判で明らかにされている。外部との接触を絶たれた取調べの中で、被疑者は圧倒的に精神的にも肉体的にも不利な状況に置かれるため、何よりもその場の苦しみを逃れたい気持ちにかられ、将来、死刑に繋がりがかねないことが理屈にわかっていても、今のこの苦痛を逃れるためには自白するしかないと考えてしまうこともある(1)。朝日新聞は「自白を迫って立証のよりどころとする捜査は、過去にも『免田事件』に代表され

る冤罪事件をうみ、無罪判決のたびに批判されてきた。今回の事件で自白をよりどころにし、過去の冤罪事件を教訓としなつた佐賀県警、佐賀地検は旧態依然とした捜査手法を早急に改める必要がある」②と批判している。

第二に、マスコミの無罪判決後の報道である。佐賀新聞はMさんの逮捕の際は号外を配り、その後も警察が発表したことそのまま記事にするだけであつた。他の新聞各紙も「証拠が少ない」など多少は警察の捜査に疑問を投げかけているが、無罪判決が出るまで「MさんⅡ犯人」という姿勢で記事を書いている。Mさんの無罪判決が出た後は、そういった姿勢で報道したことを反省したり、Mさんに謝罪することはなく、警察、検察の捜査を批判するだけである。号外を出してまでMさん逮捕を伝えたことが、世間にどれだけMさんが犯人であるということを印象付けたかを考えると、無罪が確定した後も逮捕時と同じくらいかそれ以上に紙面を割いて報道すべきではなかったか。報道がMさんのその後の人生に与えた影響を考えると、少しでもMさんは犯人でないということを人々の記憶に上書きする努力はするべきだったと考える。

また、裁判員制度が二〇〇九（平成二十一）年五月までにスタートする。「取調べの可視化がある程度進んだにせよ、このような事件の場合、裁判員制度は難しいと考えている。利点もあるが、怖くもある。警察の捜査の進め方、取調べのやり方にももっと国民の関心がむくようにしたりするシステムづくりが重要である。」と田崎さんは言う。Mさんのように世間から何の支援もないような人が裁かれた時でも、真実を見抜くことができるのかという問題がある。誰もが裁判員となりうるため、制度の仕組みを知るだけでなく、警察や検察は必ずしも真実を語っているのではなく、権力によって無実の人が犯罪者にされてしまうことがあることも一人ひとりが十分に理解しておかねばならない。

冒頭に挙げた「偽」とは、「人が為す」と書く。確かに「偽」は「人が為す」ものであり、冤罪はその中でも最悪



なものの一つであろう。しかし、同時にその「冤罪という巨大な〈偽〉」を正し得るのもまた「人が為す」ものであることを筆者はこの事件の田崎さんの取材から学ぶことができた。その意味で新たな冤罪事件を生まないためにも、北方事件の構図や田崎さんの支援活動から教訓を引き出し学んでいきたいと思う。

【注】

- (1) 浜田寿美男『自白の心理学』(岩波書店・二〇〇一年) 一〇二頁  
(2) 二〇〇五年五月十一日付朝日新聞

謝辞…本稿を執筆するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。休日の長時間にわたるインタビューを引き受けいただいた田崎以久夫さんと妻アイコさん、資料を提供いただきました佐賀新聞社福岡支局・日高勉記者、資料の利用に便宜を図っていただきました佐賀県立図書館、県立長崎図書館、長崎大学付属図書館にも心から感謝の意を表します。また、インタビュー取材に同行・ご指導いただきました長崎大学教育学部政治学ゼミナール安部俊二教官に対しても心より感謝申し上げます。

(二〇〇八年三月五日稿)